
【トロイメライ～子共の情景】

こもれび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【トロイメラリー子共の情景】

【著者名】

こもれび

29083D

【あらすじ】
遠い昔の懐かしい記憶。あの頃は、さうしてただって飛べた・・・
・・・

足元に出来た影をじっと見つめていた。

夏の強い陽射しと相成つて、一段と色濃い。

陽を遮ってくれる物はなく、堅苦しく締めたネクタイと着込んだスーツは少しの風も通してはくれない。

頬を伝う汗がひと雲、熱されたアスファルトに零れた。

それと同時に、眼前のスクランブル交差点の信号が青になる。

人の波に流されるように、顔を上げ足を進めていく。

惰性で高校を卒業して、妥協で選んだ三流大学に入学。

夢も目的も無いままに、今の当たり障りのない職業に就いた。

毎日毎日、足を止める暇も無く営業の繰り返し。

まるで数多ある歯車の一つ……人柱ですらもない。

心亡すと書いて忙しいと書くが、正にそんな感じだ。

いつからだらうか……こんな心無い人生を歩み出したのは……。

僕は救いを求めるように、高層ビルに囲まれた狭い空を見上げる。

変わり果ててしまった僕や僕の生活を余所に、空には『あの頃』と同じ輝きを放つ太陽がしっかりと浮かんでいた。

そう、『あの頃』

裸足で駆け回り、空だって本氣で飛べると思つていた……懐かしい日。

「探検。探検ごっこじょうぜ」

こんな僕でも、昔は我が儘なガキ大将だつたんだ。
その当時流行つていたのが『探検ごっこ』

探検といつても、隣町、又隣町まで行つたくらいだろうか。

でも、水筒に麦茶を入れて、少ない駄菓で買った駄菓子（当時僕らは食料と呼んでいた）をナップサックに詰めれば、気分はすっかり冒険者。

自分達の一本の足で行けるところ……それが僕たちの世界の全てだつた。

集まるのはクラスメイトの男の子三人だけ……のハズだつたのだが、
その日はいつもと少しだけ違つていた。

「私も、私もいく！」

近所のに住んでた二つ下の女の子、『チエ』がついてきてしまつたんだ。

女の子なんか居たらつまらないんだけど、駄々をこねられて渋々連

れて行くことになった。

「出発〜〜！」

僕が先頭に立ち、入り組んだ坂道を上り始める。

みんなは僕を『みつちゃん』と呼び、喜び勇んで後を付いてきた。

次から次に溢れ出る汗を腕で拭う。

タンクトップはべつとつと背中に張り付いていた。

その様子がいかにも『探検』っぽくて、更に成り切っていく。

途中で拾った枝を

「これが隊長の証だ〜！」

なんて言いながら。

田に立てる全ての物が新鮮で、触れる物全部が未知だった。

本当にどこまでも行けるような気分。

きっと、あの頃なら月にだつて行けたんだろう。

でも、所詮は子供の足。行ける範囲なんて知れている。

照らす陽に、水筒の麦茶はみるみる内に軽くなり、日が沈み始める頃にはもうクタクタだった。

「 なあ、みつちゃん。」「アレだよ……」

つこには弱音を吐き出す。

一人が言い出すと、後はもう止まらなかつた。

皆グズり出し、一人、一人と各々が道を引き返していく。

僕はそれを見送ることもせず、ただ前を見て、歯を食いしばつて歩いた。

本当は、僕だつて今すぐに引き返したかつた。

「 こじがどこかだつて？

そんなの僕が聞きたい。

でもただ一人、まだ探検隊のメンバーが僕の後ろを着いて歩いていく。

こんなに頼りない隊長を、疑うことなく。

一番キツいハズのチエだ。

このチエの存在が、帰ろうとする足をなんとか引き止めていた。

お互いの会話はもつ全く無くなり、ポツポツと街灯が燈り始める。

「 みつちゃん……足、痛い」

見てみると、チエはひどい靴ずれをしていた。
かなり長い間我慢していたらしく、赤く爛れ、血が滲んでいる。
それを見た瞬間、自分の足にも鈍い痛みを感じた。
どうやら一人揃つて靴ずれしたらしい。

「靴……脱ぐか」

チエは無言で頷くと、僕に習つて靴を持つて裸足で歩き始めた。
直に触れたアスファルトは、昼の陽の余韻を残したように、ほんの
りと暖かかった。

……それから暫くしない内に限界が訪れる。

どちらともなく、歩みは止まり、チエは座りこんでしまった。

僕は座りはしなかったものの、足はもう言つことを聞いてはくれない。

「……ヒック、ヒック」

とうとうチエは泣き出しちゃった。

それでも声は上げず、一生懸命に歯を食いしばつている。

それに吊られるように、僕も我慢していいた涙が溢れ出した。

巡回のお回りさんに保護されるまで、どうにそんな力が残っていた

のかと言つべからい一人して大泣きした。

そんな、懐かしい夏の日

ドンッ！－

肩がぶつかる感覚でハツと我に還る。
交差点のど真ん中で立ち止まつていたよつだ。

信号が点滅していくのを確認すると、慌てて顎け出す。

あの口と同じ……あの頃とは全く違つづ気持ちで。裸足だった足は、今は仰々しい革靴に包まれている。

スクランブル交差点の真ん中。

あの頃の僕が、すぐ横を駆け抜けたよつた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9083d/>

【トロイメライ～子共の情景】

2011年10月3日02時12分発行